11/22 赤旗

「冬季加算、足りねーな」

1面のつづき

家計を直撃するのは灯油の高騰だけではありません。自公政権が2013年から生活保護費の削減を続けているうえ、「消費税」がボディーブローのように生活をむしばんでいます。青森県大鰐町の原子義則さんは「糖尿病で食事管理が必要だが、お金がなくなれば食べずにいることもある」と昼食を抜いています。

築50年は超える原子さん親子の家

灯油高 青森・大鰐

消費税高すぎ

義則さんが領収書を見せてくれました。年1度のトイレの浄化槽の洗浄代2万4200円のうち消費税は2200円。「消費税10%は高すぎる。支払いを次の年金まで待ってもらえない。福祉事務所の人は、『毎月、お金をためておいてください』と言うだけだった」。毎月、保護費の支給数日前になると手元にお金はほとんどない状況です。わずかずつでも貯金は困難です。

コロナ禍で支給された1人10万円の給付金も「使わずに寄せておいたが、物価値上げで足りない分に使ってしまった。とにかく、1000円でも現金を財布に入れておきたい」と切羽詰まった気持ちを話します。

義則さんは息子の則世さんが幼い頃、離婚。父子で生きてきました。親子の趣味はアマチュア無線。自宅と義則さんのトラックに無線機を置き、義則さんの仕事中も2人で交信していました。義則さんの「夢」を聞くと「体がよくなり、仕事ができるようになり生活保護を卒業したら、目を治して車の免許をとりたい。北海道で酪農をしたい」とほほ笑みを浮かべました。

足を骨折して歩くのが不自由な原子はつよさん

火は一番弱く

同じ大鰐町に住む義則さんのおば、原子はつよさん（87）にとっても、灯油の高騰は切実な問題です。はつよさんは、生活保護と年金で1人暮らし。「一日中、火をたいてねぇと。火は一番弱くしているんだよ。冬季加算、足りねーな」。食事は朝はパン1枚とコーヒー。昼はりんご1個だけ。

昨年、転んで足を骨折。治療のため金属が入っています。10畳間にベッドで寝ていますが歩行は2本杖です。部屋は雑然としています。足腰が痛み、片付けが困難だからです。ストーブに引火しないか心配な状態です。はつよさんは「（骨折して）情けね。夜、寒くなると、毎晩、膝が病むんだ。灯油代と食事ができるお金を増やしてほしい」と話します。

コロナ禍に寒冷追い打ち

過酷な生活 国は支援を

青森県生活と健康を守る会連合会の神（じん）江美事務局長の話　青森県では1998年、生活保護を利用していた53歳の女性が布団の中で凍死し、1カ月後に発見されたことがあります。灯油を買うお金がなかった方でした。

生活保護世帯では「暖かくなったら消す」のが常で、暖かい状態を続けることは「無駄」と自分に言い聞かせ過酷な生活を続けています。住居は古く粗末なアパートが多く、寒風が吹き込むなど、防寒対策が不十分です。朝起きた時の温度は氷点下のことも多く、布巾や水道が凍っていることも多々あります。

厚生労働省は2015年から冬の命綱の冬季加算まで引き下げました。「健康を害しない室温か、飢えない食か」を迫られ、その上、コロナ禍による出費に寒冷が追い打ちをかけています。国の責任による細やかな支援が喫緊の課題です。